

込み上げる感情に、呼吸が乱れる。

強く目を閉じた瞬間、抑えきれなかったものが、頬を伝って零れ落ちた。

「すまない……すまなかった、ラウル……」

謝罪の声が、かすかに上ずる。

ラウルの顔を見ることができないまま、アルドリックは瞼を閉じて息を吐いた。

そのとき、不意に気配が動く。

反射的に、身体がびくりと震えた。

カチャカチャ、と金属の触れ合う音が鳴る。

ラウルは寝台脇のテーブルへ手を伸ばし、鍵を取ると、無言のまま拘束具に触れた。

冷たい感触が、手首からするりと離れる。

長く不自然な姿勢で縛られていたせい、腕を下ろした途端、肩の奥に鈍い痛みが走った。

——解かれた。

どうやらラウルは、アルドリックに抵抗の意思はもうないと判断したらしい。

その瞬間、視界の端に、部屋の出入り口が映る。

ラウルの背後。

ベッドの下には、無造作に投げ置かれた自分の衣服。

（……行ける）

拾い上げて、そのまま走れば――。

この部屋は内鍵のはずだ。

そう気づいたときには、もう身体が動いていた。

右手で拳を握り締め、振り向きざま、ラウルの頬へ叩きつける。

「ぐっ――！」

拳に鈍い痛みが返り、同時に、ラウルの身体が大きく傾いた。

（今だ――！）

アルドリックはその隙に身を滑らせ、ベッドから床に散らばる衣服へ手を伸ばしかけた、その瞬間――

「うわっ……！」

腕を掴まれた。

一瞬だった。

振り返り、再び拳を振るおうとするが、打ち込む前に手首を捕らえられる。

「離せっ！」

「……あんた、本当……いい性格してるよ」

ラウルの口角が、片方だけ歪む。

殴られた痛みよりも、逃げられかけたことへの苛立ちが滲んだ表情だった。

剣技や統率力なら、アルドリックの方が上だ。

だが、至近距離での体術では――敵わない。

一気に体勢を崩され、シーツの上に押し倒される。

身を振って抵抗するが、力の差は明白だった。

「……っ！」

手首を掴まれ、冷たい金属が触れる。

カチャリ、と乾いた音。

再び拘束具だと理解したときには、すでに遅かった。
右手首と、右足首。

短い鎖で、同時に繋がれる。

続けて、左手首と左足首。

同じように、金属が噛み合う音が鳴った。

「な……なんだ……これ……っ」

腕を突っ張ろうとした瞬間、同じ側の脚が引き寄せられる。

脚を伸ばそうとすれば、今度は腕が縮む。

「……っ、くそ……！」

伸ばしたくても、伸ばせない。

力を入れるほど、身体は内側へ折り畳まれる。

かろうじて膝を閉じて抵抗するが、脚が伸ばせないせいで、秘部は否応なくラウルの前に晒されていた。

——ジュプツ！

「んっ——あっあ！」

躊躇いもなく、二本の指が一気に差し込まれる。

思わず背を反らし、喉から声が零れた。

「どう足掻いても、あんたは俺にぶち犯される運命なんで。諦めて、素直に喘いでください」

「ふざっ、けるなっ、んっ、あ、あっ！」

——グチュツ、ジユプツ、チュクツ、チュクツ。

内部を広げるように、少々乱暴に指が掻き回される。

呻き声に応じるように、さらに香油が足され、じゅぶじゅぶと濡れた音が響いた。

「あっ、ダメだっ、ラウル……あっ、ああっ♡」

「声、甘くなってきましたね。ここ、やっぱり気持ちいいんだ？」

「きもちく、ない……っ、も、やめ……あっああ♡」

「そうですか？ でも、ここ——俺の指を啜えて、ひくひくしてますけど」

「んあっ——！♡」

——ビクンツ！

腰が大きく跳ねる。

逃げ出したくて脚を伸ばそうとするが、拘束されている以上、それも叶わない。

爪先に力が入り、呼吸が乱れる。

目元に生理的な涙が滲み、荒い息がなかなか整わない。

一点を執拗に擦られ、じわじわと積み重なる感覚に、限界が近いことだけははっきりと分かった。

「やめ……ダメ……あぁっ♡ ラウル……ダメ、だっ——んぁっ！♡」

「なにがダメなんですか？　ちゃんと教えてくださいよ」

「いっ……いっ……んん、イぐっ……！　や、やめ……あっ、んぁっ！」

駆け上がる直前の感覚に、アルドリックは息を止め、身構えた。

だがその瞬間——ふっと、はかったようにラウルの指が動きを止める。

「……ふ、あっ……？」

浮かんだ涙で滲む視界の中、アルドリックはラウルを見上げた。

ちゆく、と音を立てて中から指を引き抜いたラウルは、恍惚とした表情のまま、こちらを見下ろしている。

「……ラウル？」

ラウルの手元が、自身の下半身の衣服を弄っている気配がした。

呼吸がままならず、ぼんやりしていた意識が、その動きひとつで強引に引き戻される。

「や、やめろ……ラウル……それは、ダメだ……」

内腿に、生身の肉棒が押し当てられる感覚に、アルドリックはひっと喉を鳴らした。

「ダメ？ やめろ？ 何言ってるんですか。あんた、もう俺に命令できる立場じゃないでしょう」

くちゅり、と。

アルドリックの孔に、ラウルの先端が押し当てられる。

「だって……お前は……俺にとって、弟みたいなもので……」

恐怖で喉が震える。

与えられる屈辱、それだけでなく——ここから先へ進めば、ラウルとの関係は、もう後戻りできなくなる。

「俺は……」

ラウルの上半身が、ゆらりと動いた。

身を伏せるように、アルドリックの上へと覆い被さってくる。

「あんたのこと、兄だなんて思ったこと、一度もないです」

「――ラウル……」

「ずっと、ずーっと、やらしい目で見てました。あんたの中に、俺の突っ込んで……意識ぶっ飛ぶくらい、善がらせたい」

至近距離で、ブラウンの瞳が真っ直ぐに見据えてくる。

その眼光の強さに、アルドリックは目を逸らすことができなかった。

「ぜったい、誰にも渡したくない。あんたは――ここから先、生きてる限り、永遠に俺のものです」